

## 中国の日本研究叢書ブーム

唐 権

### はじめに

中国における日本研究叢書の出版事情については、すでに本誌『世界の日本研究』第5号（1993年）に掲載された魯義氏の報告「中国における日本研究」に言及されている。そこで魯氏は、中国人日本研究者による当時の最も重要な成果として二つの叢書を挙げている。一つは、中国国内で出版された『戦後日本叢書』（航空工業出版社図書編集部編、1988年）で、もう一つは、日本で出版された『東アジアのなかの日本歴史』シリーズ（六興出版、1988-1990年）である。前者を、魯氏は「中国の日本研究者がはじめて協力して書かれた」ものと位置づけている。

わたしは本報告において、魯報告の続きを書こうと思う。1990年代以降から今日までの20数年間、どのような日本研究関連の叢書が出版されたのかを概観し、若干の考察を加えて、近年の中国における日本研究の動向の一側面を浮き彫りにしたい。特に叢書に注目するには、むろん理由がある。

中国における1990年以前の日本研究はまだ貧弱であり、叢書類の出版がたいへん少なかったことは、魯氏の指摘した通りである。このことについては、1980～90年代に北京で学生生活を送っていたわたしも、多少記憶している。当時の様子をいまと較べると、隔世の観があると言わざるを得ない。というのは、「日本〇〇叢書」と銘打ったシリーズものはいまや氾濫しており、バブリーな様相すら呈しているからである。数年前、日本に長く留学した後に帰国したわたしは、その盛況ぶりにかなり驚いた。以前は、中国語で書かれた日本研究の書物が出版されるとたいへん迷わずに買っていたが、いまは個人ではとても買い切れない状態だ。

ともあれ、中国における日本研究書の出版事情は、ここ20年で大きく変化している。中でも叢書の大量出現は、この変化を象徴するものにほかならず、いま中国出版界の一大特色と言っても、あながち不当な位置づけではないだろう。

う。本報告は、日本研究に関連する叢書の出版事情を調査対象として、ひとまず全体像の把握を試みる。この作業によって、中国における日本研究の動向がいくつか見えてくるに違いない。

## 一 1990 年以前の日本研究叢書一瞥

今日の叢書ブームを理解するためには、過去の出版事情をも知っておくべきであろう。1990 年代中期以前の中国において、どのような日本研究関連の叢書が出版されたかをてっとり早く知るには、北京日本学研究中心編『中国日本学文献総目録』（中国人事出版社、1995 年）が有効である。魯報告の結論を検証する目的も含めて、まずこの目録を調べてみた。

すると、意外な事実が一つ判明した。1930～40 年代にも、日本研究叢書の出版ブームが実は起きていた、ということである。戦前、戦中期の中国で出版された叢書のタイトルを挙げると、「反日帝国主義叢書」「日本研究会小叢書」「抗戦文庫」「武漢留日同学会日本問題研究叢書」「民衆抗戦知識叢書」「日本問題叢書」「日本知識叢刊」「戦時日本叢書」「日本文化小叢刊」「抗戦叢書」「抗戦小叢書」と、計 11 種が数えられる。このうち、「反日帝国主義叢書」が 1931 年から出版されているので、この年を日本研究叢書刊行史の始まりと考えてよいだろうと思う。

ただ、国民党時代に出版されたこれらの叢書がその後の日本研究に与えた影響は、非常に限定的なものだったのではないかとわたしは考える。それぞれのタイトルからも推測できるように、叢書の大半が時局に応じるための出版物、すなわち戦争パブルの産物であった。速断を避けたいのだが、その中で研究成果として後世に名を残したものがあるかとなると、寡聞にして一つも知らない。それだけでなく、新中国が成立した 1949 年以後、国民党時代の知の遺産をことごとく否定する風潮が長く続いたことも忘れてはいけない。お陰で上記の叢書はほとんど忘れ去られたまま、今日に至っている。

そして、新中国の日本研究は、おおざっぱに言えば 1960 年代に発足し、改革開放以後の 1980 年代に入ってからようやく軌道に乗るという経緯をたどってきた。このあたりの事情は、前述の魯報告のほか、井上如氏の論文「中国における日本研究と情報資源」（『学術情報センター紀要』第 5 号 [1992 年]）や

『中国における日本研究』（中華日本学会・北京日本学研究中心監修、国際交流基金企画、1999年）などにも詳しく紹介されているので、ここでは繰り返さない。ただ、叢書の出版に関しては、魯報告に対する修正を一つ加えなければならない。1980年代後半に入ると日本研究叢書が誕生するが、前述の『戦後日本叢書』（1988年）は実は最初のものではない。1987年に吉林教育出版社が『日本語精髓叢書』という語学関係のシリーズを開始し、1994年までの7年間に計10種の著書を刊行している。これこそが、新中国における日本研究叢書の濫觴と目されるべきであろう。

## 二 1990年代以降の日本研究叢書概観

中国では、1980年代後期になってようやく日本研究叢書が現れたが、当時としてはまだ珍しいものであった。上述したように、日本で出版されたものを入れても、この時代の日本研究叢書の数はずか3種しかない。では、その後の叢書出版はどうなったのか。以下、わたしは1990年まで遡り、2013年までの20数年間に出版された叢書の書誌情報をできるだけ多く網羅して、その全貌を提示してみたい。各叢書の書誌データは、主として次のような方法で集められた。

1997年以前に出版された叢書の多くは、国際日本文化研究センターの図書館に所蔵されている。各叢書の現物および『中国日本学文献総目録』を利用して、それぞれの書誌データを収集した。

1997～2008年の間に出版された叢書の書名は、南開大学日本研究院が刊行した特集『専集 近十年来中国的日本研究（1997-2008）』（『南開日本研究』、2010年）の中に列挙されている。それを手がかりとして、この10年間のデータを集めた。

2008年以降に出版された叢書については、わたしの個人蔵書や個人見聞のほかに、林昶「2010年中国的日本社会文化研究概況」（『日本学刊』第6期[2011年]）、王宝平「2012年中国的日本文化研究」（『日語学習与研究』第6期、総169号[2013年]）などの関連研究を参考にした。

なお、各叢書の書誌情報を採集するに当たっては、国際日本文化研究センター図書館OPAC、中国知網（CNKI）、関連出版社のウェブサイト、中国圖書の販売サイトである「当当網」（<http://www.dangdang.com/>）や「孔夫子旧書

網」(<http://www.kongfz.com/>)などのネット資源も適宜活用させていただいた。以下、1900年から現在までの20数年間に出版された日本研究叢書の概要を、出版年次に沿って挙げておく。

1. 「日本文化研究叢書」(1990-98)：杭州大学出版社により刊行されたシリーズ、王勇編。内容は、主として杭州大学日本文化研究中心の研究成果をまとめたものであるが、論文集と図書目録のほか、大庭脩『江戸時代中国典籍流播日本之研究』のような翻訳書もある。計8種の著書が出版されている。
2. 「東方文化叢書」(1991-93)：北京大学の季羨林・周一良・龐僕が編輯したシリーズ。江西人民出版社によって計22種の著書が出版された。内容は、中国史研究と仏教研究が中心だが、周一良『中日文化関係史論』、嚴紹璽『日本中国学史』など、日本関連の研究書、さらに末木剛博『東方合理思想』のような日本人著作も含まれている。
3. 「日本叢書」(1992-)：商務印書館が1992年に創刊したシリーズ計20種の著書。このシリーズは、商務印書館がそれまでの30数年間に刊行した100余りの日本関連翻訳書から、名著を選んで再出版したものである。叢書の名称は正確に言えば、「日本叢書第一輯」であるが、第二輯以降は出版されていない。内容は五つの領域(①哲学・思想、②政治・外交、③経済、④社会・文化、⑤歴史・宗教)に分かれており、福沢諭吉『文明論概略』や新渡戸稲造『武士道』など日本人が書いた著作のほかに、『菊与刀』や『日本維新史』などの欧米学者の著書もいくつか入っている。
4. 「日本研究博士叢書」(1992-99)：中国の大学と研究機関に提出された博士論文のシリーズ。中国社会科学出版社が計6種の著作を出している。また、東方出版社は、1994～95年の間に計9種の著作を出している。
5. 「戦後中日関係史叢書」(1994-2002)：中国社会科学出版社のシリーズ、田桓編。計3種の出版物(年表、文献集、著述)が刊行されている。

6. 「日中文化交流史大系」(1996)：周一良と中西進の両氏を総編集者とし、日中の大勢の歴史学者が共同で執筆したシリーズ。浙江人民出版社より刊行された。全部で10冊からなり、『歴史』『思想』などのジャンル別にまとめられている。なお、同シリーズには日本語版もあり、「日中文化交流史叢書」として大修館書店から出版されている。
7. 「南開日本研究叢書」(1995–2008)：天津の南開大学日本研究院が編集したシリーズで、天津人民出版社によって刊行された。計37種の著書がある。内容は同研究院に所属する研究者の書いたものが多く、出版は国際交流基金の助成による。
8. 「日本研究叢書」(1996–2002)：復旦大学日本研究中心の研究成果シリーズで、上海財経大学出版社によって刊行された。約20種の著書がある。内容はシンポジウムの成果をまとめた論文集や翻訳等さまざま、概して言えば、現代日本の政治・経済に関するものが多い。
9. 「日本人眼中的近代中国」(1999)：光明日報出版社による日本人学者の中国旅行記シリーズで、わずか2冊で終了。青木正児・内藤湖南著、王青訳『兩個日本漢学者的中国紀行』と、吉川幸次郎著、錢婉約訳『我的留学記』である。
10. 「東方文化集成 日本文化編」(1999–2012)：経済日報出版社と崑崙出版社による大シリーズの一部で、編者は季羨林。計12種の著書が出されている。そのうち中国人研究者の著作が大半を占めるが、梅原猛『諸神流竄 論古事記』や、加藤周一『日本文化論』のような翻訳書も入っている。
11. 「中日文化研究文庫」(2001–2008)：上海古籍出版社によるシリーズ、王勇編。計12種の著書が出版されている。大半は中国人研究者の著作であるが、富田昇『近代日本の中国芸術品流転与鑑賞』のような翻訳書もわずかに入っている。

12. 「中日歴史研究中心文庫」(2002–2008)：中国社会科学院中日歴史研究中心の研究助成プロジェクト「中日歴史研究課題」の成果として、社会科学文献出版社から刊行されたシリーズ。内容としては、1874～1945年の近代史、特に日中戦争史に関する著作が多い。研究助成金はすべて日中友好会館によって提供された。約60種の著作が出版されている。
13. 「日本社会学名著訳叢」(2003–2005)：北京日本学研究中心が企画し、周維宏が編集したシリーズ。1990年代以降に日本で出版された社会学書から10種を選んで翻訳したもので、商務印書館によって出版されている。
14. 「日本経済学名著訳叢」(2003–2005)：北京日本学研究中心が企画し、金洪雲が編集したシリーズ。生活・読書・新知三聯書店によって、計5種がすでに出版されている。
15. 「日本入華求法僧人行記校注叢刊」(2004–2008)：古代と中世の日本人留学僧が書いた中国旅行記シリーズ。『行曆抄校注』など計3種の著作が、花山文芸出版社によって出版されている。
16. 「人文日本新書」(2004–2007)：中国人研究者が書いた、日本文学研究を中心とするシリーズ、王曉平編。計19種の著作が宁夏人民出版社によって出版されている。その大半は一定の学術性を保ちながら、脚注の省略、画像の大量使用、表紙のお洒落なデザインなどで、一般読者を惹きつけるための工夫もされている。「出版者的話」という後書きの紹介文によると、このシリーズには「梅之輯」(日中文化文学)、「桜之輯」(文学)、「松之輯」(宗教、風俗、歴史)、「竹之輯」(芸術)など四つのジャンルがあり、それぞれ6～10種の著作を含むという。つまり、最大で40種の著書を出版する計画になっている。
17. 「日本学術文庫」(2006–)：商務印書館が早稲田大学の協力の下で出したシリーズ。編集委員会は二つあり、国内委員会は王仲濤をリーダーとし、国外委員会は劉廸をリーダーとする。両氏が連名で書いた「編者序言」によ

ると、本シリーズは「日本古今の社会科学経典名著 150 種」を出す計画で、できる限り日本の学術を網羅しようという野心的な叢書である。同シリーズの第 1 輯は 15 種の著作の出版を計画しており、2006 年に出版された陳力衛訳の和辻哲郎『風土』と閻小妹訳の土居健郎『日本人の心理結構』を筆頭に、2013 年出版の津田左右吉『日本の神道』（鄧紅訳）まで、これまでに 7 種の著書が出版されている。すべて翻訳者による詳細な解説が付いている。

18. 「日本文化大講堂」（2007）：上海辞書出版社による一般向けの日本文化紹介シリーズ、主編は王勇。『武道』や『棋道』など、計 4 種の著作が刊行されている。
19. 「近代日本人中国遊記」（2007–2012）：中華書局による日本人の中国旅行記シリーズ、張明傑編。選書の範囲は主として 1871 ~ 1920 年前後とされているが、1862 年「千歳丸」の上海渡航に関連するものも入っている。曾根俊虎『清国漫遊志』や桑原鷺蔵『考史遊記』など、計 13 種の旅行記が出版されている。
20. 「東亜人文・知日文叢」（2007–2011）：中央編訳出版社によるシリーズ。清華大学の「東亜文化講座」で学術講演を行った中国人研究者がその講演内容に基づいて書いたもので、内容は一般向けの学術随筆や日本体験記などが中心となっている。王中忱『走読記』など計 6 種の著書が出版されている。
21. 「域外漢籍研究叢書」（2007–2012）：南京大学域外漢籍研究所によるシリーズで、張伯偉編。「域外漢籍」とは、中国以外の漢字文化圏の国、たとえば朝鮮・ベトナム・日本で成立した漢文典籍のこと。計 11 種の著書を中華書局より出版している。そのうち約半分は日本関連のもので、ほかは朝鮮とベトナムの漢籍に関するものである。日本関連のものには、蔡毅『日本漢詩論稿』や陳捷『人物往来与書籍流伝』などの好著がある。



22. 「日本文化訳叢」(2007-2011): 華東師範大学出版社による日本人論の翻訳書シリーズ、陸留弟編。杉本良夫、Ross E. Mouer 共著の『日本人論之方程式』など3種の著作が出版されている。
  
23. 「日本中国学文萃」(2008-2009): 中華書局による翻訳書シリーズ、王曉平主編。内容は日本人による中国文学研究を中心としているが、その趣味性や読みやすさが選択の基準となっている。本シリーズ中には、青木正児『琴棋書画』、南方熊楠『縦談十二生肖』などの名著もあれば、西原大輔『谷崎潤一郎と東方主義 大正日本の中国幻想』のような中堅研究者による著書もある。計21種の著作が出版されている。
  
24. 「閲読日本書系」(2010-): 笹川日中友好基金の出版助成によって刊行された翻訳書シリーズ。社会科学文献出版社・南京大学出版社・世界知識出版社などが参与し、政治・経済・文化など広範囲にわたる日本の学術著作を10年間で100種類翻訳するという野心的な計画で進められている。書物の選択は、高原明生(東京大学)を委員長とする選書委員会が担当し、メンバーは日本人学者4名、中国人学者5名、ほか日本財団1名から成っている。2013年までは、越沢明『偽満州国首都計画』や永井良和『戦後日本大衆文化』など計18種の著書が出版されている。
  
25. 「日本現代化歷程研究叢書」(2010-12): 世界知識出版社によるシリーズ、楊棟梁主編。『日本近現代政治史』など中国人研究者の著書が計12種出版されている。
  
26. 「日本民俗学訳叢」(2010): 学苑出版社による翻訳書シリーズ。『民間伝承論与郷土生活研究法』など、柳田國男および彼の弟子たちが書いた民俗学関連の著作計3種が出版されている。
  
27. 「20世紀中日文化関係研究系列叢書」: 商務印書館によるシリーズで、中国人研究者の著作を収める。現在までに、徐氷著『20世紀三四十年代中国文化人的日本認識: 基於『宇宙風』雜誌的考察』(2010年)と、同じく



徐氷著『中国近代教科書中の日本と日本人の形象：交流与衝突の軌跡』  
(2014 年) の 2 種の著作が出版されている。

28. 「日本百科知識文庫」(2010)：上海文芸出版社による一般向けのシリーズ、王勇主編。『日本書法芸術』など計 3 種の著作が出版されている。
29. 「日本社会文化研究叢書」(2010–2013)：中国社会科学出版社によるシリーズ、崔世広主編。胡澎『性別視角下的日本婦女』など 4 種の著作が出版されている。
30. 「西方研究日本叢書」(2011–)：江蘇人民出版社が最近出した翻訳書のシリーズ、劉東主編。劉東氏は「海外中国研究叢書」という大シリーズの編集者として知られている。これは主としてアメリカの大学における中国研究の成果を紹介するものだが、中国の学界では大きな反響を巻き起こした。「西方研究日本叢書」は、言ってみれば「海外中国研究叢書」の姉妹編としての性格を持っている。2011 年には、Peter. J. Arnesen 著、王金旋訳『中世紀的日本大名 大内家族対周訪国和長門国の統治』をはじめ、計 5 種の著作が出版されている。同書掲載の出版予告によると、入江昭やドナルド・キーンなど 14 人の著作が、もうすぐ出ることになっている。既出と予定を合わせると、計 19 種に上る。「西洋の日本研究」と銘打ったものの、今のところ、アメリカにおける日本研究の成果を紹介している、という印象が強い。
31. 「日本社会与文化研究叢書」(2013–)：南京大学出版社によるシリーズ。現在までに葉琳『当現代日本文学女性作家研究』など 2 種の著作が出版されている。

### 三 考察

以上見てきたように、1990～2013 年にかけて、計 31 種の日本研究叢書が中国で出版された。以下、これら叢書のデータを分析材料として、近年の日本研究動向を探ってみたい。

注目すべき変化の一つ目は、言うまでもなく、この20年間の日本研究叢書の増加ぶりである。1980年代には3種しかなかったのが、1990年代には10種に増え、2000年以降はさらに21種増えた。加速度がついたような増え方で、新しい日本研究叢書が次々に現れている。

増加のスピードが速くなる現象は、特に2004年以降、顕著になる。2003年以前の叢書は、だいたい年に1種、たまに年に2種というように緩やかな増え方であった。ところが、近年になると年に3種（2004年）、5種（2007年）ないしは6種（2010年）にまでおよぶ年もあり、その増加ぶりは飛躍的と言わざるを得ない。

二つ目の変化は、叢書の大型化にある。一つの叢書に収録された著作数を見ると、1990年代の叢書はだいたい10種前後であった。商務印書館の「日本叢書」（1992年）は最大規模を誇ったものだが、それでも20種の著作しか収録していない。それに比べて、同じ商務印書館はいまや、「日本学術文庫」（2006年）において150種の収録を計画しており、笹川日中友好基金が賛助する「閲読日本書系」（2010年）も100種の収録を目指している。こういう大型志向は、ほかに中国社会科学院の「中日歴史研究中心文庫」（2002年）や王曉平主編の「人文日本新書」（2004年）、「日本中国学文萃」（2008年）などの叢書にも見られ、一つの流行といってよい。

注目すべき三つ目の動向は、出版形態の変化である。1990年代に出版された叢書は、商務印書館の「日本叢書」を例外として、中国社会科学院のシリーズ、杭州大学のシリーズ、南開大学のシリーズ、復旦大学のシリーズという形でまとめられており、もっぱら特定の日本研究機関によって出されていた。出版の経費も、ほとんど国際交流基金などいくつかの団体の補助金に頼るばかりであった。かつて井上如氏が指摘したように、学術書の翻訳などは、補助金があれば出版は歓迎されないという事情があった。

それに比べて、近年における叢書の出版はどちらかというと出版社が中心となっている観がある。特に、「日本学術文庫」や「閲読日本書系」、「日本中国学文萃」などの大型叢書は、学術書の翻訳を積極的に進めている。もっとも、学術性を重視する一方、重厚な著作を好まないという傾向もはっきりと存在する。出版されたものの多くは、学術性を保ちながら、面白さや娯楽性をも兼ね備えた著作である。広範な読者層を狙う商業出版が、いまや叢書出版の主流になりつつある。

このような変化が生じた背景には、日本研究者以外に、日本に強い関心を持つ読者層が近年の中国社会の中には大勢いる、ということが挙げられよう。それは、日本語教育の普及、海外観光人口の増加、漫画アニメの影響など諸々の原因によって誕生した読者層であるが、彼らをターゲットとして、たとえば2011年には“*It is Japan*”をキャッチフレーズとして掲げ、さまざまな日本知識を紹介する娯楽雑誌『知日』も誕生している。

それからもう一つ、いわゆる「海外中国研究」の影響も無視できないであろう。1980年代半ば以降、ヨーロッパとアメリカにおける中国研究に関する大規模な翻訳や紹介が行われてきた。「劍橋中国史」や「海外中国研究叢書」をはじめとする大型の叢書が次々に出版され、中国の学界に大きなインパクトを与えている。「日本學者研究中國史論著選譯」（中華書局、1992年）というシリーズもそのうちの一つだが、中国史研究における日本の重要性（東洋史の膨大な研究蓄積、日本に所蔵されている豊富な中国関係史料など）が広く理解されるようになったのは、やはり近年のことであろうと思う。「近代日本人中国遊記」（2007年）、「域外漢籍研究叢書」（2007年）、「日本中国学文萃」（2008年）などの叢書は、いずれも中国研究の延長線上に位置づけられるシリーズである。「近代日本人中国遊記」の訳者の一人で、知人のW氏によると、同叢書は出版後、出版社側が予測しなかったほどの好調な売れ行きを示したらしい。そして、これら叢書の読者は、必ずしも日本に関心を持つ者とは限らない。

ちなみに、日本の東洋史に関する翻訳書は、単行本の形で出版されたものも少なくない。たとえば、杉山正明著『クビライの挑戦—モンゴルによる世界史の大転回』（講談社学術文庫）は2013年に中国語に訳されたが、その中国語版はハードカバーで、装幀もたいへんお洒落である（『忽必烈の挑戦 蒙古帝国与世界歴史的大転回』中国社会文献出版社）。

読者層の拡大と関連して、日本へ向かう関心の分散化が、四つ目の変化として挙げられよう。1980～90年代頃の中国人研究者の持つ日本への関心は、近代化の問題に集中していた。このような関心はむろんいまもまだ健在ではあるが、さまざまな関心事項の一つに過ぎない。近代化問題のほかに、たとえば、漫画アニメなどのサブカルチャーに対する関心も高いし、それから地域研究の方法論も大きな関心の的となっている。日本民俗学の研究法を中心内容とする「日本民俗学訳叢」（2010年）もその一例だが、最も注目すべきは、アメリカ

の日本研究成果を大々的に紹介する「西方研究日本叢書」(2011年)であろう。西洋の研究者が日本をどのように研究してきたか、という関心がはっきりと現れている。日本語以外の言語で書かれた日本研究を重要視する姿勢は、それまでなかったものである。

最後に、五つ目の新動向として、在日中国人研究者の活躍を挙げなければならない。近年出版された叢書の中で、彼らは編集者として、または名著の翻訳者や解説者、あるいは学術専門書の著者として、八面六臂の活躍を見せている。専門知識に対する造詣の深さだけでなく、広い研究視野を持つことや、日本の学術史ないし学界事情にも通暁することなどは彼らの有力な武器である。「日本中国学文萃」を編集した王曉平氏や、和辻哲郎『風土』の翻訳と解説を行った陳力衛氏、『人物往来与書籍流伝』を著した陳捷氏などは、いずれも日本の学界で活躍し、叢書の中で優れた業績を残した在日中国人研究者である。

## おわりに

中国の日本研究叢書ブームは、いまでも新しい翻訳書と研究著作を次々と生み出している。そこにバブルがあることや、学術水準の低い著作が多く含まれていることは、むろん否めない。しかし、日本の人文研究と世界の日本研究にある良質な部分も、このブームによって確実に中国人研究者の視野に入り、日本研究を含む中国の人文研究全体のレベルアップに役立っている。進行中のこのブームは、最終的に中国の読書界にどのような影響をもたらすのだろうか。論評するには時期尚早で、控えるべきかもしれない。報告者としては、ブームがもたらした書物の山を前に、とりあえずその中から日本関連の名著や好著を見つけては買ってくることを楽しみとしている。書物の値段は以前よりだいぶ高くなったものの、まだ日本よりはずっと安いからである。

## 参考文献

- 安藤彦太郎「中国の日本研究管見」『アジア経済旬報』第 1107 号（1980 年）
- 井上如「中国における日本研究と情報資源」『学術情報センター紀要』第 5 号（1992 年）
- 汪向荣「中国の日本研究の現状」『アジア文化研究』18 号（1992 年）
- 魯義「中国における日本研究」国際日本文化研究センター編『世界の日本研究』第 5 号、1993 年
- 北京日本学研究中心編『中国日本学文献総目録』中国人事出版社、1995 年
- 中華日本学会・北京日本学研究センター監修、国際交流基金企画『中国における日本研究』世界知識出版社、1999 年
- 「専集 近十年来中国的日本研究（1997～2008）」『南開日本研究』、2010 年。本報告で私が参考にしたのは以下の各篇である。楊棟梁「中国的日本研究新動態」、李卓「日本文化、社会研究」、王晓平「日本文学研究」、宋成有「日本史研究」
- 林昶「2010 年中国的日本社会文化研究概況」『日本学刊』第 6 期（2011 年）
- 王宝平「2012 年中国的日本文化研究」『日語学習与研究』第 6 期、総 169 号（2013 年）
- 王敏「現代中国における日本研究概説（その一）：社会文化を中心に」『国際日本学』、2003 年
- 王敏「現代中国における日本研究概説（その二）：社会文化を中心に」『国際日本学』、2005 年